KELES Newsletter

関西英語教育学会報 2025年度 第1号

事務局:〒582-0026 大阪府柏原市旭ケ丘4丁目698-1
大阪教育大学 多文化教育系 篠崎文哉研究室内
E-mail: kelesoffice@gmail.com 学会ウェブサイト: http://www.keles.jp/

2025年7月30日発行

巻頭言
英語の授業の「探究化」

関西英語教育学会会長 横川 博一（神戸大学）

会員の皆様には日ごろから、関西英語教育学会の活動に対してご理解・ご支援をいただき、会員の皆様お一人お一人がさまざまな形でかかわってくださっていることに、心から感謝申し上げます。

6月8日・9日の二日にわたって同志社大学において開催された今年の研究大会も盛会のうちに終えることができ、多くの皆様にご発表・ご参加をいただきましたことに感謝しております。発表数や参加者数といった「数」にいたずらにこだわるつもりはないのですが、今回は何かいい偶然が重なっていつもよりも多くの発表応募をいただきました。発表数が多いと、それだけテーマ・トピックも多様になり、またそこに参加する方も多くなり、それだけ充実したやりとりもなされるという好循環が生まれます。そういった意味で今年の研究大会は成功であったと考えてよいのではないかと思っております。このことが英語教育の明日、そして将来に繋がっていけばいいなと願っています。

＊

先日、岡山県総合教育センターが主催する高等学校外国語研修講座に呼んでいただいて、２時間半ほど講義・演習を行ってきました。私のようなものでもこの種の講座にときどき呼んでいただくのですが、ここ数年のテーマは、もっぱら「指導と評価の一体化」、「言語活動の高度化」といったようなものが多く、私などはそのたびに準備に四苦八苦です。しかし、こうした機会をいただくことで私自身、だんだん理解が進んでいく（ように感じる）のでありがたいことです。お話をいただいたときは絶対に無理だと思うことも、やっているうちにだんだんわかってくるから不思議ですね。だから楽しいんですよね。まさに「探究」のプロセスです。

そう、私は英語の授業も「探究化」したら楽しくなると思っています。すでにそのような実践をされている学校や先生方も多いと思います。高等学校の『英語コミュニケーション』も順番に隅から隅まで「やったことにする」よりも、今年担当する２年生はまずこういうテーマでやってみよう、そうするとLesson 3の題材が使えるな、生徒たちには教科書本文をざっと読んでどんな「問い」を立てさせようか、意見形成のためにどうやって調べさせようか、この課はディベートをやるのに向いてるな、最後の課題はディベートをやった経験を踏まえてエッセイにしよう、といった具合いに考えてみると、先生も生徒も楽しくなりますね。そして、このように言語活動を中心に授業を組み立てると、(形成的) 評価がとてもしやすくなって、生徒たち自身が自分でよい学習のサイクルを回すことができるようになっていきますね。しかし、その一方で、高度な言語活動を可能にするためには、基本的な言語材料の指導なくして達成できませんし、たとえば教材の範囲内で「リテリング」できるようになるような練習は絶対に必要でしょう。こうした地道な活動もバランスよく一体化して取り入れることで、探究化された英語授業が活きることになります。

生徒も、先生も、（ついでに学会も）、ワクワク、ドキドキ、（できればキュンキュン）するような（当たり前の）授業づくりが、今こそ求められているように思います。そしてそれは、英語の授業の「探究化」によって実現できると思うのです。

報告　関西英語教育学会 第 31 回研究大会

開催日：2025 年 6 月 7 日(土)・8 日(日)　会場：同志社大学　烏丸キャンパス

6 月 7 日（土）、8 日（日）に、第 31 回研究大会が開催されました。今年は、小張敬之先生、福島玲枝先生によるご講演をはじめとして、4 件の企画ワークショップ、公募ワークショップ 1 件、研究発表・事例報告 20 件があり、盛会のうちに終了しました。164 名の方々にご参加いただき活発な議論が展開されました。講師をお引き受けくださった先生方をはじめ、ご発表くださった皆様、参加してくださった皆様、会場を提供してくださり事前のご準備等にご尽力くださった皆様に心から感謝申し上げます。

＜7 日（土）企画ワークショップ＞

「いまさら聞けない!? 生成 AI のプロンプト（再）入門
ー英語教育に生成 AI を活かすための
プロンプトを作るにはー」

講師：金丸　敏幸先生（京都大学）

生成 AI が教育現場に浸透する今、教員には AI を活用する力が不可欠となりつつある。本ワークショップはそのニーズに応えるべく、〈理論編〉と〈実践編〉の二部構成で、即戦力となるプロンプト設計技術を身につける場として開催された。

前半の〈理論編〉では、まず生成 AI の仕組みを概観した。講師の金丸先生は「プロンプトとは AI への注文書のようなもの」と比喩を用いて説明した。レストランで曖昧に頼むと予期せぬ料理が出てくることもあるが、細かくオーダーすれば狙い通りの一皿が届く――生成 AI も同様に、指示の具体性が出力精度を左右するという。

効果的なプロンプトを設計するポイントとなるのは〈役割設定〉〈具体的な指示〉〈条件・制約〉〈例示〉の 4 つだ。たとえば「あなたは中学 2 年生を担当する英語教員です。have＋過去分詞の 4 択問題を 3 問、日常シーンを題材に、正答と解説付きで作成してください。例：……」とプロンプトを与えれば、即座に質の高い練習問題が生成されるというわけだ。

後半の〈実践編〉はハンズオン形式で、参加者は語彙・文法・読解・スピーキングの 4 領域から課題を選び、プロンプト設計を体験した。サンプルとして語彙クイズや比較級の図解、SDGs に関する読解問題、ロールプレイ用スクリプトなどが紹介され、教室での活用イメージが膨らんだ。

金丸先生はその場でプロンプトを打ち込み、生成結果を映しながら微調整して生成を繰り返す、即興の PDCA を披露して聴衆の関心を引きつけた。AI は教材作成やフィードバックの効率を飛躍的に向上させるが、指示が曖昧では期待外れの結果になりがちだ。「一発で完璧な答えが得られる」という誤解こそが「AI は使えない」という評価を招いている、と指摘した。

アンケート（有効回答 29 件）では「大変満足」「満足」の高評価が 93%（27/29 件）を占めた。小・中学校、高校、大学まで幅広い教員が参加し、校種を超えた関心の高さがうかがえた。自由記述には「明日からの授業でも使いたい」「発表を聞いてやってみようという気になった」など、実践意欲をかき立てるとの声が多数寄せられた。

次期学習指導要領案でも生成 AI の活用がクローズアップされる中、プロンプト設計技術の習得は教師にとって急務だ。金丸先生は、温かい語り口と巧みな比喩で難解な概念を解きほぐし、現場教員のつまずきに寄り添う姿勢を貫いていた。

金丸先生が示したのは、教師が AI に取って代わられる未来ではなく、教師と AI が協働して学びを深める未来だ。次の授業でプロンプトを一行書き換える――その小さな一歩が、英語教育の新しい地平を切り拓くかもしれない。

報告者：服部　拓哉（立命館大学）

「生成 AI 時代の産出技能指導」

講師：矢野　浩二朗先生（大阪工業大学）

本ワークショップでは、クオリティが急激に向上しつつある生成 AI の技術動向、その AI を活用したスピーキング、ライティング指導について紹介と説明をいただいた。

最初に、より複雑なタスクに対応できるマルチモーダル AI の現状について実例を挙げながら解説をされ、ワークショップ参加者が使用している AI についてその場でアンケートを取られ、そのデータをアンケート回答 AI 分析ツールで分析された。矢野先生ご自身が活用されている生成 AI ツールも紹介された。多数の AI を使いこなされていることは少々驚きであったが、チャット、コーディング、エージェント、3D の 4 系統の複数 AI ツールを目的に応じて使われている、と説明があった。その中でエージェント AI とは、指示さえすればユーザーに代わって自律的にアプリ開発などのタスクを実行するシステムで、Vibe Coding で作られていることを説明された。AI に私達が日常使用している言語で指示を出してコード生成を行わせ短時間でソフトウェア、アプリを開発する技術であり、先程のアンケート回答 AI 分析も Vibe Coding で先生が作成されたものである。ご自身が担当の各授業でも頻繁にアプリを作成しておられ、この Vibe-Coded Apps 使用の利点を説明された。受講者の能動的な学習を促せる、授業のニーズに合わせた機能を持たせられる、作成が容易で授業ごとに必要に応じて準備できる、などである。

次に、Vibe Coding で作成したアプリの活用について、スピーキング指導に焦点を当てて具体的に実演と説明をされた。まずサブスク形式の既存のスピーキング練習アプリを紹介された後で、対話練習をする AI アプリを、その場で V0（ヴイ・ゼロ）という AI を用いてシステム・インストラクション（プロンプト）を入力しながら Vibe Coding で作成する実演をされた。一つの例として、AI を「たこ焼きが好きな大阪人」の設定としたものを作成された。様々な設定で対話練習ができるものを作成可能だが、システム・インストラクションが長くまた複雑になるほどバグや不成功の確率も高まることも、併せて説明された。また、双方向のリアルタイム通信が可能な Realtime API も紹介された。これは人間同士の自然な会話に近い 0.3～0.5 秒のレスポンス速度を実現した最先端技術とのことである。

ライティング指導については、学生が生成 AI にすべてを委ねずに各自の判断や思考を大切にさせるため、「メタバース展示制作」による英語学習を展開しておられる。英語によるバーチャル展示空間を作成する、という内容である。生成 AI が文章のみならずスライドも作成できるようになった現在でも、3D 空間そのものは AI では作成できないため、学生が努力すると説明された。

矢野先生は「Vibe Coded Apps が未来の教育を変革する」というメッセージを私達参加者に投げかけられたが、AI 活用が英語教育と切り離せないものになりつつあると改めて実感した。

報告者：玉村　公一（神戸学院大学）

＜7 日（土）講演＞

「生成 AI と英語教育の未来：革新と共存の展望」

講師：小張　敬之先生（グローバル Biz 専門職大学）

生成 AI が英語教育に与える影響と、AI 共存時代の教育の理想像を考察する貴重な機会となった。急速な AI の進展の中で、単なる技術導入に留まらず、人間が持つ「世界観」「知恵」「対話力」の育成が重要だと感じた。

冒頭では、Gemini 2.5、ChatGPT 4.5、Copilot、Perplexity、Claude、NotebookLM といった最新の生成 AI ツールの活用が強調された。特に AI エージェント的側面を持つ NotebookLM は、教育分野での活用が奨励され、私自身も卒業論文指導で有用性を実感し、実践していたため、AI 活用への自信を深めた。

次に AI 時代において人間に不可欠な力として、「Grit（やり抜く力）」と「Resilience（回復力）」が挙げられたのは印象的だった。安易な答えを求める風潮の中、やり抜く粘り強さや、予期せぬ問題に直面しても絶望せず再起する回復力が重要だとの指摘に納得した。

教育の本質は「対話」であり、AI は反復的タスクの最適化・効率化を担う「道具」である。AI の限界と人間の「創造性」「直観」「適応力」の重要性を再認識させられた。今後の社会で求められる「知識ではなく知恵」や「クリティカル・シンキング」は、教育者のテーマだ。この本質を踏まえれば、「昨日と同じ教え方では、子供の明日を奪うことになる」との言葉が示唆するように、固定化された教授法は通用せず、AI と人間の補完関係を理解し柔軟に活用する姿勢が教育現場には求められるのではないと感じた。

また、AI 時代にふさわしい評価基準として

「Learning Oriented Assessment」の重要性が強調され、大学で教えるべき重要なことは学生自身がAI 回答の正確性や適切性を判断する力を育成することであるとの提言は、今後の大学教育の方向性を示すものであると感じた。

AI との共存において「Collective Intelligence（集合知）」の重要性が語られ、人間の「Exploration（探求）」と「Exploitation（活用）」のバランスが鍵を握るとされた。日本企業が Exploitation に偏りがちな現状は教育分野にも当てはまると感じられ、効率化だけでなく探求の重要性を意識すべきだと肝に銘じた。

講演全体で「世界観（World View）」の重要性が強調された。「Language shows world view」の言葉通り、AI 時代には「質の高い世界観を持つ対話」が重要だと述べられた。大学での学びが、相対的な知識の積み重ねの中で先行研究を踏まえ絶対的な真理を探求し、自身の世界観に統合するプロセスとの説明は、私自身の学びの姿勢にも影響を与えた。また、「目に見えないものに真実がある」という視点や、異文化理解、他者の世界観への洞察力育成も、真の国際人育成に不可欠だと感じた。

AI の課題として、「感情の欠如」、「依存性」、「文化的ギャップ」が挙げられた。AI を「受け身的に利用する（コピペなど）」リスクも指摘され、積極的かつ高度な活用と AI リテラシー育成が不可欠だと共感した。安易な AI 利用の弊害を避けるため、リテラシー教育の重要性は今後一層高まるだろう。

本講演は、英語教育の現場における AI 活用と人間性豊かな学びの調和の重要性を明確に示した。生成 AI を適切に活用し、人間ならではの教育的価値を高める活発な議論と実践が今後も望まれる。教育者が主体的にこの変化に対応していく必要性を強く感じた次第である。

報告者：松尾　徹（大阪女学院大学）

＜8 日（日）企画ワークショップ＞
「AI と英語教育 理論編：
理論的背景に基づく授業設計と実践」
講師：水本　篤先生（関西大学）

本ワークショップでは、水本先生が開発された Web アプリケーション「LexiTracker」を授業で活用する方法について紹介していただいた。

まず、アプリ開発の理論的背景を学び、英語教育に生成 AI を利用する際の注意点を理論的観点から考察することができた。

まず最初に学校現場での生成 AI の活用状況について紹介された。現在では、生徒がプロンプトを考える取り組みもある。AI を使うことが実際に学校で導入する際の、ChatGPT などの AI 利用に関する留意事項について提案していただいた。教員向けガイドラインでは、AI 利用（特に情報の正確性の限界）を学生に説明すること。個人情報や機密情報を AI に入力しないことの指導。AI を活用した授業設計や評価方法についての継続的な改善を行い、教育の質を高めることの大切さを述べられた。生徒向けのガイドラインとしては、AI 利用に関する倫理的問題や学習への影響を主体的に考察すること。AI は翻訳、要約、語彙リスト作成、文法説明などの補助としての利用が可能である。しかし言語生成（作文や会話）を AI に代行させるのではなく、ブレインストーミング、推敲、校正など自身の学習活動を補助する形で活用すべきであることを提案された。また AI ツールの「利点と問題点を十分に理解したうえで、教育や学習活動を補助する目的で慎重かつ効果的に活用することを推奨された。

ワークショップでは、LexiTracker を体験する機会をいただいた。LexiTracker とは「語彙学習進捗管理システム」である。語彙レベルを判定し、単語レベルだけでなくフレーズも可能である。LexiTracker は API を使用している。API とは対照としているサービスから情報を抽出する「ソフトウェア同士をつなぐ橋」である。生成 AI の統合（API）GPT-4o-mini, Llama-3.3, Gemini-2.0 を紹介していただいた。生成 AI などによるフィードバックの方法。また何でも質問可能で自動問題作成機能を持つ。また、データを活用した自律学習を促すものである。ことを述べられた。

授業内での使用では、ライティングの授業で ChatGPT を活用できる場面、アウトラインの作成（ブレインストーミング）、書き直し（リビジョン）、校正、ライティングの振り返り（履歴を使用）を紹介していいただいた。

生成 AI 活用のために、教員は①授業では（はじめに・常に）使い方の方針を学習者と共有すること、②与えないのではなく、与えて考えさせることが大切、③AI ありきで授業、測定、評価を考える、④

「AI ではできないことは何かを？」を考える、⑤プロダクトよりもプロセスを記録に残して評価する、⑥「英語学習・習得・指導」の再定義を考えること、など生成 AI の利用と英語指導に必要なことや今後の課題についても触れられた。今回拝聴した発表は、これからの教育現場での生成 AI と英語教員の役割を再考する貴重な機会となった。英語教育への新しい指針となることを教えていただいた。

報告者：清水　敦子（京都市立旭丘中学校）

「教育現場における AI 活用の現在地：生成 AI×英語×ライティング・スピーキング指導」
講師：山下　美朋先生（立命館大学）
谷野　圭亮先生（大阪公立大学高等専門学校）
南部　久貴先生（滋賀県立彦根東高等学校）

山下先生は、生成 AI を活用した英文作成支援ツール「Transable」を紹介された。Transable には、翻訳・代替表現の照会・エッセイの評価という 3 つの AI 機能が搭載されている。学生はこれらを用いて、①日本語から英文を考える（自力で書けない場合は、AI が複数の表現を提示）、②英語のパラグラフを作成する（AI で文法を確認し、翻訳で内容を確認）、③評価を受ける（AI がパラグラフを点数化し、修正コメントを提示）という作業を繰り返しながら英作文に取り組む。これにより学習者は、AI を活用して初稿から修正を重ね、最終稿を完成させることができる。山下先生はこの活動を、AI-Assisted Autonomous Learning（金丸, 2024）の実例として説明された。

南部先生は、高校授業における「やり取り」活動として、自作アプリを用いたタスクの実践を報告された。1 つ目は「図書館に PC を忘れたので電話で問い合わせる」というもので、生徒は図書館スタッフ役の AI と会話を行う。2 つ目は「間違い探し」で、イラスト A を持つ AI とイラスト B を持つ生徒が、お互いのイラストの相違点を説明しながら探す（このタスクは生徒同士でも実践された）。生徒の感想では、AI との対話は「正確な英語インプットが得られる」「（他人とのやり取りに不安を感じる生徒も）取り組みやすい」と好評だった。一方で、生徒同士の対話では、ジェスチャーや表情などの非言語的やり取りの良さも評価されていた。これらを踏まえ、南部先生は「AI との対話は選択肢の一つとして活用すべき」とまとめられた。

谷野先生は、自作されたフィードバック提供ツールを紹介された。このツールは、生徒の英作文を入力すると、「オリジナル英文」「語数」「コメント」「具体的な修正点」「書き直し案」を A4 サイズ 1 枚にまとめて出力できる。これにより、多忙な英語教員でもフィードバックがしやすくなる。谷野先生は、生成 AI を使った教授支援システムの利点を多角的に説明された一方、こうした便利なツールの背景には開発やデバッグに多くの時間が費やされている現実も指摘され、AI による過度な効率化への懸念を示された。

とはいえ、本ワークショップを含む今大会の多くの発表で紹介された API（Application Programming Interface）を用いた外国語学習アプリはいずれも画期的であり、これらの活用によって、これまで手が届かなかった教育の領域にもアプローチが可能になりつつあると実感した。こうした技術をいち早く学び、活用し、その成果を発信して日本の外国語教育に貢献される先生方が多く集うこの学会で学べることに、改めて感謝した 2 日間であった。

報告者：佐々木　顕彦（武庫川女子大学）

＜8 日（日）講演＞
「学習者のやりとりを支えるスピーキング指導――会話分析を手がかりとした授業実践の視点」
講師：福島　玲枝先生（畿央大学）

講師の福島玲枝先生は、学校現場での豊富なご経験と、会話分析（CA）研究という 2 つの視座を往還しながら、学習者の「やりとり」の力を育む授業実践について詳述された。

講演では、冒頭で映画の一場面を用いて、拙い英語でも「何を伝えたいか」を重視し、互いを受け入れるというコミュニケーションの大切さを指摘し、スピーキング指導の核として、①やりとりそのものの実践、②「伝えたい」と思える文脈作り、③学習者が持つ言語資源の尊重、という 3 つの柱を提示された。この指導観を支える理論的背景が、他者とのやりとりの中で協働的に意味を構築する能力としての「Interactional Competence（IC）」である。さ

らに、自身の研究分野である CA の視点を応用し、学習者が実際に「できていること」と「できていないこと」を微細に可視化することで、教師は的確な支援のタイミングを見極められると述べられた。

具体的な指導戦略①:「伝えたいけど言えない」を支える 5 つの心構え

学習者が発話に詰まる場面に対し、福島先生は日本語の特性を踏まえた英語での発話を促す「5 つの心構え」を提案された。

1. **一番伝えたいことを残す**:言いたいことが多い場合、一字一句訳さず、最も重要なメッセージに絞る。
2. **SV を明確にする**:「誰がどうする」を明確にする。例えば「やばい」という一言も、「My test result is so bad.」のように、主語と動詞を補うことで具体的な英語表現になる。
3. **文章はシンプルにする**:複雑な状況も、個々の動作に分解し、短い文を時系列で並べることで、英語での表現が容易になる。
4. **曖昧な表現は具体的にする**:漠然とした評価語を用いるのではなく、具体的な意図に置き換える。
5. **簡単な表現にする**:難しい概念も、平易な言葉に置き換える。「奈良の景観は時代の息遣いが感じられる」を「奈良には古くて美しい町がある」のように、より基本的な語彙で表現する。

これらは英語に「訳す」のではなく、省略された要素を「補う」という発想転換であり、学習者の心理的負担を大きく軽減するものである。

具体的な指導戦略②:「伝えあう」ための授業構成

効果的な授業は、「いつ、何の活動を、どんな目的で行うか」という "Why that now?" の問いを持つことで構築されると福島先生は言う。講演では、Story Retelling 活動を例に、緻密に設計された指導法が紹介された。

インプットとインテイク:導入では「オーラルイントロダクション」を効果的に用いる。写真を見せながら対話し、新出語句やキーセンテンスを、リテリング本番で必要となる指差しなどの行為モデルとともに埋め込む。また、授業冒頭の 3 分間を使い、生徒が本文から答えを探すゲーム形式の QA 活動を行うことで、集中力を高めつつ、既習事項の定着を図る。

アウトプットと評価:リテリングは、単なる内容再生から始め、徐々に「感想を加える」「質問する」といった対話的な要素を加えて発展させる。特に重視するのは、生徒個々のパフォーマンスに対する形成的評価である。評価は、教師が一方的に行うのではなく、クラス全体で「良かった点」や「次に聞きたいこと」を共有する。これにより、「どのようなやりとりが評価されるのか」に関するクラス規範が育まれ、学習者の取り組み方が変容していく様子が語られた。

こうした実践は、現在担当する大学の大人数授業でも応用されている。高校までとは異なる環境に対し、「個を見て支える」から「集団を通じて個を支える」へと発想を転換。「授業はチーム戦」を標語に、グループ単位で活動の責任を課し、スマートフォンでの動画提出なども活用しながら「やり取り」を生み出す工夫が紹介された。

福島先生の講演は、指導対象が変わっても一貫して「やりとり」を教育の中心に据えることの重要性を訴えるものであった。授業前には学習者の「できないこと」に注目して支援を計画し、実践後には「できたこと」を徹底的に見つけて価値づける。このスタンスと体系的な授業デザインが連携することで、学習者は真の「やりとり」の力を育んでいく。

指導法と同様に丁寧に計算し尽くされたご講演を伺い、「福島先生の授業を一度受けてみたい」と強く思わされた。

報告者:佐古　孝義（明星大学）

報告　2025 年度 関西英語教育学会　会員総会

開催日：2025 年 6 月 7 日(土)・8 日(日)　会場：同志社大学　烏丸キャンパス

2025 年度会員総会では、下村冬彦先生（立命館大学）による司会進行のもと、議長に吉田達弘先生（兵庫教育大学）が選出され、2024 年度活動報告および決算報告、会計監査報告、2025 年度活動計画および予算案などについて報告・提案がなされ、承認されました。

１．2024 年度活動報告

◆関西英語教育学会 2024 年度（第 30 回）研究大会

日程：2024 年 6 月 8 日（土）・9 日（日）
会場：龍谷大学　大宮キャンパス
内容：講演 2 件、研究発表・事例報告 15 件、企画ワークショップ 3 件、公募ワークショップ 1 件、公募フォーラム 1 件

◆全国英語教育学会第 49 回福岡研究大会

期日：2024 年 8 月 24 日（土）・25 日（日）
会場：福岡工業大学
主催：全国英語教育学会（地区学会：北海道英語教育学会・東北英語教育学会・関東甲信越英語教育学会・中部地区英語教育学会・関西英語教育学会・中国地区英語教育学会・四国英語教育学会・九州英語教育学会）
担当地区学会：九州英語教育学会

◇関西英語教育学会担当プログラム

【課題研究フォーラム（2 年目）】

タイトル：「指導と評価の一体化」の実践課題―小・中・高での実践研究―
コーディネーター：今井 裕之（関西大学）
提案者：羽渕 弘毅（西宮市立甲陽園小学校）
狩野 伸行（堺市立上野芝中学校）
有嶋 宏一（鹿児島県教育庁高校教育課）

◆セミナー・共催行事

◇第 60 回 KELES セミナー

日程：2024 年 10 月 1 日（日）
開催形態：オンライン（Zoom）、65 名参加申込
テーマ：ICT―そのごくありふれた日常の中で、英語教育にどう活用するか
講演 1「中高 6 年間、毎日オンライン英会話&ICT 活用でどう変わる？その取り組みと実践の紹介」篠原 弘樹先生（松蔭中学校・松蔭高等学校教諭）
講演 2「『ふつうの教員』が『ふつうの生徒』に行った個別最適・協働的な学びを取り入れた授業実践」山村 潮音先生（高松中央高等学校教諭）

◇第 61 回 KELES セミナー

日程：2024 年 11 月 3 日（日）
開催形態：オンライン（Zoom）、86 名参加申込
テーマ：現場教師の実践知を生かすために学会ができること―改めて問い直す実践研究―
講演 1「実践研究を行う意義や課題：実践研究を進めていく上で考えるべきこと」藤田 卓郎先生（福井工業高等専門学校）
講演 2「KELES は Practitioner Research をどう位置づける？―紀要編集の経験から―」吉田 達弘先生（兵庫教育大学）
指定討論・全体討論
指定討論者：柳瀬 陽介先生（京都大学）

◇第 62 回 KELES セミナー

日程：2024 年 12 月 22 日（日）、50 名参加
会場：龍谷大学梅田キャンパス研修室
テーマ：デジタル時代の英語授業を考える
講演 1「児童の思考力と自己効力感を高め、自律的な学びを育む指導と評価」泉 惠美子先生（関西学院大学）
講演 2「人格形成をめざす英語教育って本当に実践できるの？」加賀田 哲也先生（大阪教育大学）

◇第 28 回卒論・修論研究発表セミナー

日程：2025 年 2 月 9 日（日）
開催形態：オンライン（Zoom）、発表 13 件、115 名参加申込
スペシャル・トーク「英語教育の意味づけ論 ―「意味順」を一例として」田地野 彰先生（名古屋外国語大学教授・京都大学名誉教授）

◆課題研究プロジェクト

テーマ：「生身からのことばで語る—AI 時代の英語教師の成長—」

研究期間：2024～2026 年度、3 か年

プロジェクト・リーダー：山本 玲子（京都外国語大学）

メンバー：柳瀬 陽介（京都大学）・長嶺 寿宣（龍谷大学）

◆広報・刊行物

◇ニューズレター　年 4 回発行（7 月、12 月、1 月、3 月）

◇紀要『英語教育研究』第 48 号刊行（紀要編集委員会）

◇学会会員情報誌『KELES ジャーナル』第 10 号刊行

2．2024 年度決算報告

議案 2．2024 年度　決算報告

■収入の部（単位：円）

項　目		2024 年度予算額	2024 年度決算額	備　考
1	前年度からの繰越金	2,792,058	2,792,058	
2	学会年会費	2,326,000	2,231,000	全国英語教育学会年会費も含む
3	参加費	100,000	68,400	関西英語教育学会第 30 回研究大会、KELES セミナー（第 60/61/62 回）
4	販売・掲載料	30,000	24,430	KELES ジャーナル・卒修論予稿集販売、論文掲載費
5	その他	150,000	151,764	全国英語教育学会からの事務局補助費
計		5,398,058	5,267,652	

■支出の部（単位：円）

項　目		2024 年度予算額	2024 年度決算額	備　考
1	通信費	550,000	467,213	各種郵送代（学会紀要、ニューズレター、切手代、その他）、HP サーバー管理費、振込手数料
2	研究費	850,000	391,014	講師謝礼、プロジェクト費、KELES ジャーナル執筆料、研究大会弁当・飲物代
3	印刷費	1,400,000	764,038	紀要『英語教育研究』・Newsletter・払込取扱票・各種案内印刷、KELES ジャーナルデータ制作、J-Stage 登録代行
4	会議費	20,000	16,744	拡大理事会弁当・飲物代
5	交通費	100,000	186,374	講師・理事・幹事交通費
6	事務費	20,000	1,361	養生テープ
7	全国英語教育学会	580,000	556,000	2,000 円×278 名
8	予備費	30,000	0	
9	名簿管理業務委託費	532,000	0	
10	次年度への繰越金	1,316,058	2,884,908	
計		5,398,058	5,267,652	

項　目	2024 年度予算額	2024 年度決算額	備　考
収入金額	5,398,058	5,267,652	
支出金額	4,082,000	2,382,744	
差引残高	1,316,058	2,884,908	次年度への繰越金

2025 年　5 月　25 日
関西英語教育学会（KELES）　会計担当幹事
鳴海　智之

3．2025 年度活動計画

◆関西英語教育学会 2025 年度（第 31 回）研究大会

日程：2025 年 6 月 7 日（土）・8 日（日）

場所：同志社大学　今出川校地（烏丸キャンパス）志高館

内容：講演 2 件、企画ワークショップ 4 件、研究発表・事例報告 20 件、公募ワークショップ 1 件

◆全国英語教育学会第 50 回記念埼玉研究大会

https://kate-jp.sakura.ne.jp/cf/

期日：2025 年 8 月 9 日（土）・10 日（日）

会場：獨協大学

主催：全国英語教育学会（地区学会：北海道英語教育学会・東北英語教育学会・関東甲信越英語教育学会・中部地区英語教育学会・関西英語教育学会・中国地区英語教育学会・四国英語教育学会・九州英語教育学会）

担当地区学会：関東甲信越英語教育学会

◇関西英語教育学会担当プログラム：課題研究フォーラム（1 年目）

テーマ：生身からのことばで語る—AI 時代の英語教師の成長—

コーディネーター：山本 玲子（京都外国語大学）

提案者：山本 玲子（京都外国語大学）「教師インタビュー『生身からのことば』事例報告」

柳瀬 陽介（京都大学）「実践者と呼ばれる研究者—実践の『アート』の妥当性—」

長嶺 寿宣（龍谷大学）「言語教師認知の観点からの分析」

指定討論者：吉田 真生（京都大学大学院生）

※全国英語教育学会第 51 回大会（2026 年度開催）においても、引き続き「課題研究フォーラム（2 年目）」を担当。

◆セミナー・共催行事 ※日程および開催形態は変更する場合があります。

第 63 回 KELES セミナー

2025 年 10 月 5 日（日） オンライン（Zoom）

第 64 回 KELES セミナー

2025 年 11 月 2 日（日） オンライン（Zoom）

第 65 回 KELES セミナー

2025 年 12 月 20 日（土） 対面開催、会場未定

第 29 回卒論・修論研究発表セミナー

2026 年 2 月 8 日（日） 対面またはオンライン（Zoom）

◆課題研究プロジェクト（継続）

◇テーマ：「生身からのことばで語る—AI 時代の英語教師の成長—」（2024～2026 年度、3 か年）

プロジェクト・リーダー：山本 玲子（京都外国語大学）

メンバー：柳瀬 陽介（京都大学）・長嶺 寿宣（龍谷大学）

◆広報・刊行物

◇ニューズレター 年 4 回発行（7 月、12 月、1 月、3 月の予定）

◇紀要『英語教育研究』第 49 号を 2025 年度末に刊行予定（紀要編集委員会）※紙媒体での刊行を廃止。

◇学会会員情報誌『KELES ジャーナル』第 11 号を 2025 年度末に刊行予定 ※2024 年版より紙媒体での刊行を廃止。

4．2025 年度予算案

議案 5．2025 年度予算案

■収入の部（単位：円）

項目		2024 年度決算額	2025 年度予算額	備考
1	前年度からの繰越金	2,792,058	2,884,908	
2	学会年会費	2,231,000	2,444,000	一般会員 326 名，学生会員 38 名，賛助会員 11 社 全国英語教育学会年会費も含む
3	参加費	68,400	95,000	研究大会，各種セミナー
4	販売・掲載料	24,430	30,000	学会紀要(SELT)掲載料
5	その他	151,764	150,000	全国英語教育学会からの事務局補助費
計		5,267,652	5,603,908	

■支出の部（単位：円）

項目		2024 年度決算額	2025 年度予算額	備考
1	通信費	467,213	136,160	郵送費，振込手数料，HP サーバー管理費。
2	研究費	391,014	466,000	研究大会・各種セミナー運営費（講師料，茶菓等を含む），依頼原稿執筆料，研究プロジェクト経費
3	印刷費	764,038	570,000	学会刊行物 PDF 化および J-Stage 代行，学会封筒印刷，コピー代
4	会議費	16,744	200,000	研究大会及び各種セミナー会場費
5	交通費	186,374	190,000	交通費，宿泊費
6	事務費	1,361	240,000	学会ウェブサイト更新，文房具等
7	全国英語教育学会	556,000	568,000	2,000 円×284 名
8	予備費	0	30,000	
9	名簿管理業務委託費	0	0	
10	次年度への繰越金	2,884,908	3,203,748	
計		5,267,652	5,603,908	

５．2025 年度役員一覧

会　長
横川 博一（神戸大学）

副会長
今井 裕之（関西大学）

顧　問
沖原 勝昭（神戸大学名誉教授・
　京都ノートルダム女子大学名誉教授）
織田 稔　（元関西大学）
瀬川 俊一（京都府立大学名誉教授）
村田 純一（神戸市外国語大学名誉教授）
吉田 信介（関西大学名誉教授）

幹事長（副会長兼務）
篠崎 文哉（大阪教育大学）

紀要編集委員長
佐藤　臨太郎（奈良教育大学）

幹　事（12 名）
坂本 南美（同志社大学）
佐古 孝義（明星大学）
杉浦 悠真（滋賀県立河瀬中学校・高等学校）
谷野 圭亮（大阪公立大学工業高等専門学校）
寺嶋 宏樹（桃山学院大学）
中西 洋平（関西大学大学院生）
鳴海 智之（兵庫教育大学）
服部 拓哉（立命館大学）
三木 浩平（近畿大学）
南 侑樹（神戸市立工業高等専門学校）
宮崎 貴弘（神戸市立葺合高等学校）
山形 悟史（岡山大学）

理　事（13 名）
赤松 信彦（同志社大学）
泉 惠美子（関西学院大学）
加賀田 哲也（大阪教育大学）
齊藤 倫子（関西学院大学等非常勤講師）
佐々木 顕彦（武庫川女子大学）
名部井 敏代（関西大学）
長谷 尚弥（関西学院大学）
平井 愛（神戸学院大学）
増見 敦（神戸大学付属中等教育学校）
水本 篤（関西大学）
溝畑 保之（桃山学院大学非常勤講師）
柳瀬 陽介（京都大学）
吉田 達弘（兵庫教育大学）

紀要編集委員（6 名）
黒川 愛子（帝塚山大学）
今野 勝幸（龍谷大学）
中西 のりこ（神戸学院大学）
橋本 健一（大阪教育大学）
福島 玲枝（畿央大学）
三上 明洋（関西学院大学）

会計監査　（2 名）
杉浦 香織（立命館大学）
染谷 藤重（京都教育大学）

※ 同職位内では 50 音順。下線は新任の役員を示す。

６．その他の審議事項

(1) 学会会員情報誌『KELES ジャーナル』は 2024 年度刊行の第 10 号から、学会誌『英語教育研究』は 2025 年度刊行の第 49 号から、紙媒体での刊行を廃止し、電子媒体（J-Stage）での公開のみになることが原案通り承認された。

(2) 会員情報の管理等に関する業務委託について、引き続き検討を進めることを原案通り承認された。

退任のご挨拶

幹事を退任される先生方

小川 知恵先生（京都産業大学）

短い期間でしたが幹事として多くのことを学ばせていただきました。先生方の熱心な取り組みに刺激を受けておりました。今後も、一学会員として研究大会などで熱いものを感じ取りたいと思っております。ありがとうございました。

下村 冬彦先生（立命館大学）

2 年間の短い期間でしたが、学会運営に関わる機会をいただき、さまざまな学びを得ることができましたことに御礼申し上げます。今後も陰ながら本学会のご発展と新幹事の先生方のご活躍をお祈り申し上げます。

新本 庄悟先生（滋賀大学）

2 年間、幹事として学会活動に関わらせていただき、貴重な学びの機会となりました。温かくご支援くださった皆様に心より感謝申し上げます。

濱田 真由先生（神戸大学）

3 年間幹事を務めさせていただくなかで、様々な貴重な経験を積ませていただき、ともに学会活動を支える先生方から多くの学びを得ることが出来ました。心より感謝申し上げます。今後の本学会の益々のご発展を心よりお祈り申し上げます。

学会事務局からのお知らせ

◆学会誌『英語教育研究』（SELT）
第 49 号 投稿論文募集

関西英語教育学会では、学会誌『英語教育研究』(SELT) 第 49 号（2026 年 3 月刊行予定）への論文投稿を募集します。会員の皆様から多数のご投稿をお待ちしております。詳細は別紙をご覧ください。

なお、本号（第 49 号）より紙媒体での刊行を廃止し、電子媒体（J-Stage）での公開のみとなりました。

投稿受付締切 2025 年 8 月 31 日（日）22:00

◆各種お問い合わせ先

年会費、学会誌、セミナー、入退会などに関するお問い合わせは、学会ウェブサイトの「お問い合わせフォーム」をご利用ください。
https://docs.google.com/forms/d/e/1FAIpQLSfTFG1bUpHC84nkkd2zTyvniFfvUD1ve_AfA557qcNUHYLHdg/viewform

＊2025 年 1 月末時点で年会費が未納の方には「2024 年度会費納入のお願い」を送付しておりますが、同 2 月末時点で年会費が未納の場合は、2024 年度末をもって退会扱いの処理をさせていただいております。会員を継続される場合はご連絡ください。

◆メールアドレスご確認のお願い

本学会ではニューズレターは PDF 化して会員の皆様宛に一斉メール配信をしております。

もし届いていない場合は、お手数ですが、下記フォームにて、メールアドレスを登録・更新くださいますようお願いいたします。
https://forms.gle/deRoVkjPDa9iMKkr6